身體保全法の實驗二報

本年三月中身體保全法の一奇術を施印ュ附して世上識者の教を請たりしが去月八日福岡縣筑後國久留米市米屋町二丁目吉川安吉氏より一報を辱なふせり其の要に同月二日久留米在御原郡追分村井上マツの家に於ての講會ュ十人計り集まり吉川氏も出席したる故此奇術を試むるの便もあらんと思ひ人々に就て脉度を診せしュ敢て異狀もなかりしが只其中一人の脉度亂れ居あり此人ハ同郡櫛原村松田吉太郎とて三十五歳になる强壯の者なり此時ハ聊さゝも病氣などの容子なく飲食も人並になし居り其の夜十二時過る頃俄かに赤痢病に罹り翌日十二時過ュ至り遂に死亡したり此事を傳聞者皆奇術の玄妙なるを感歎せざるはなしといへり然れバ此の術ハ只變死を前知するのみならず病災の死をも前知することを得べきものと思ハる已に此理ありとせバ醫術の診斷上ュ取りても亦簡便の一奇法を發見したるものといふべし又小生の知人に松嶋孫十郎氏と云人あり長野縣上伊那郡手良村に住居せり本年の夏所用ありて筑摩川を渡しュ折節洪水なるが爲め奔流激怒し其危きこと言ハん方なし水主二人ながら棹打折りて水中に陷り生死の程も知ざりき船客は十二人なりしが手足と恃む水主に別れ各々爲ん所を知らず皆茫然として色を失ふ船ハ流れに漂ひ去り覆へらんとするもの數回に及び水練を知る船客八人ハ身を躍らし辛らふじて岸に泳ぎ着きしも氏外三人は水練の心得なきを以て運を天に任せ船の中に蹲まり居るのみ氏ハ兼て保全術を知たる故此所ぞ大切の場合と思ひ屢々脉度を試るに敢て異狀なかりしかバ少く安堵の思をなす然れども船は益々危く十中八九は命助かるべくも見えざるより反て此の術も恃のむに足らずと疑念を起し今ュも水藻に埋まるならんと打萎れて待つ程ュ船ハ激波に卷れて岸邊に近づき一叢の竹林中に流れ入りたり水淺きを見るより三人ハ直に竹藪の中に飛下り氏一人殘りしが漸くにして船を繫ぎ止めたり折りしも川向ふより助船來りて四人を打乘たれバ皆々其無事を祝し合へり玆に於て氏ハ保全法の功益著るくして斯かる危難の際ュても狼狽せざりしことを喜こび去月上旬懇に小生に謝せられたり前の二報は各々實驗ュ繫り空理を談ずるの比に非ず變災を前知せるとは曾て廣告せし隱醫を初め松嶋氏ュ於て毎々効を見きども病災を前知することハ吉川氏の實驗を始となすべし伏て希がハくハ博識の諸君幸ひに敎示を賜ハらんことを請ふ

筑摩川洪水難船の圖

明治二十五年壬辰九月七日

東京池之端仲町廿七番地
寶丹本舗　守田治兵衛父
守田長禄翁敬白